

リアル72

リンクオン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

メギドラルから追放されたメギド達。もしも、彼等が何らかの因果で、違う世界にて  
転生を果たしていたら。

リアル  
7  
2

目

次

1



# リアル72

## ハルファスの場合

「…うーん…どれにしよう…決められない」

頭の後ろで纏められた、桃色のふわふわした髪の少女がそう言つて悩み始めてから、既に2分が経過しようとしていた。その姿を傍で見続けてきた自分としては、別に気になる物でも無いのだが…ちらりと横を見ると、既に自分達の前にも多くの人が、4日間限定でチキンナゲット（30ピース）が33%オフと言う、聖夜に相応しいピエロからの贈り物を手にしようと並び始めている。

このままでは、彼女がどれにしようかと悩んでいるナゲットのソース 자체が無くなりそうなので、声を掛けてみる。

「?

…決めてくれるの?」

こちらを向いて、首を傾げる様が可愛らしい。頭を撫でると目を閉じて、こちらのしたいようにさせてくれるのめっちゃ魔性だと思います。撫でながら、さてどうしようかと思案する。

ソースは4種類あるのだが、特盛りのナゲットを1箱買うと選べるのは3つ。普段の俺なら、あまり辛いのは好きではないのでマスターを抜いて期間限定の2つとバーべキューが勝利の法則！と即断するのだが：

：折角の聖夜なのだし、少し奮発してしまおう。

「…え？ 4つも買うの？ お金大丈夫？」

大丈夫だと、財布の中から彼女に一葉さんを見せてウインクする。これで、各ソースを2つずつ選ぶことが出来るので彼女が悩む必要も無いはずだ。普段からバイトで金も貯めてるし、まだ自分達は高校生だし：お隣さん同士だし、どちらかの家に家族ごと集まつて交流する、と言う目的でなら、今回の代金も立て替えてもらえるかもしれない。そんな打算も組み込みつつ、主に愛しい彼女へのカツコつけを目的とした、自分にとつてはかなりの出費の為に彼女と手を繋ぎ、列に並んだ。

「いっぱい買っちゃったね。重くない？ 私、持てるけど…」

「大丈夫大丈夫。幾ら春<sup>はる</sup>：ハルフアスが悪魔だから力持ちだつて言つても、男が女の子に荷物持たせるのはカッコ悪いしな」

「えっと…やっぱり私も持つよ。両手が塞がつたら手も繋げないでしょ？」

「お、おう」

俺とハルファスは、暗くなり始めた街を歩いていた。夏には、まだこの時間でも明るかつたのになあ、なんて会話をしながら、彼女の小さく、柔らかい手を握る。

俺達の距離は、少しだけ友人と見るには近過ぎる距離で。

俺は少し顔を赤くして、いたのだろう。ハルファスの表情は、ちゃんと見てないから分からぬ。

ハルファスが、自分の前世は少年達の世界で言うところの、悪魔に似た存在だと打ち明けた時から、いや、その前から俺達の関係は変わらなかつた。

俺にとつて、ハルファスは傍に居て欲しい人。

ハルファスにとつて、俺は手を引いてくれる人……らしい。

もし、ハルファスが転生したのが、彼女の知るヴァイガルドと言う、滅亡に瀕した世界なら……この関係性は少し変わつていたのかも知れない。

でも、こうして2人で一緒に居られるのなら。そんな日常も悪くは無いんじやないかと。ふと、そう思った。

「結局、2人で食べる事になつちやつたね」

「…まさか、両方から要らん、と言われるとは思つてなかつた…」

家に帰つた俺達が、互いの家族に買つてきたナゲットを焼めた結果。

まさかの受け取り拒否。当然代金の建て替えは通用しなかつた。俺の財布は寂しくなつたが、結果としてハルファースと一緒の部屋で、2人でこたつに入りながらもそもそもナゲットを食べる、と言う役得な状況になつていていた訳だし安いもんだ。

「…うーん」

「どうした? ハルファス

…まさか、どのソースに付けるか迷つてるとか?」

「凄い。なんで分かつたの?」

「いや…そりや、普段からポテトを1本ずつ食べるか纏めて食べてみるかで悩んでるお前を見たらその位察するわ」

「…そつか…ねえ、どつちがいいと思う?」

「そうだなあ…」

個人的にはエビの方が好きだが、ハルファースはどうだろう。バーベキューは確実にこの場の選択肢では無しとして…

…うん、とりあえず好きなのを食べさせるか。

「エビにしたら?」

「うん、分かつた

…美味しい」

？」

「うん、分かつた

⋮美味しく」

ただただ可愛い。それしか感想は浮かばない。偶にリスみたいに頬を膨らませながら食べてるのも可愛いけど、テレビを見ながら少しづつ吃てるのも可愛い。

⋮なんか⋮行動の節々から小動物つて感じが滲み出てるんだよなあ⋮本人が言うには、前世の姿はモモンガとか、ムササビ因みに、モモンガとムササビの違いは大きさや住んでいる場所らしいみたいな感じなんだとか。多分可愛い悪魔だったんだろうな。うん。人間の状態でも可愛いし。

「⋮あの、どうしたの？さつきからじつと見つめて⋮」

「え？あ、ごめん。ハルファスの食べ方が可愛いなあ、と思つて」

⋮そうかな？あんまり、意識はしてないんだけど⋮」

食べ方の意識つてなんだ？マナーとかそう言うのを守つたら上品に見える寧ろ食べ汚くね？と思うマナーあるよねとか、そういうのだろうか。でも、ハルファスつてそういうの気にしそうなタイプじゃないしな⋮。

「⋮あ、映画始まるよ」

「ん？あ、もうそんな時間か…」

一緒に見ようかと話していた映画が始まる。何だかんだ、毎週映画が見られるのは嬉しいんだよな。映画じやなくとも特番系は面白いし。深夜帯の映画とかも気にはなるんだけど、わざわざ録画したり、夜更かしする程でもないかな…と思つて見逃したりする。

後々あらすじを見たら滅茶苦茶面白そうじやねえか！とか思つたり。

…そういうや、ハルフアスつて悩みはするけどそれで後悔してるところは全然見ないな  
…。俺が決めてるからなのか、案外ドライなのか…。

…いや、多分マイペースなだけだろうな。なんか、常日頃からのほほんとしてるし。  
そこが可愛いんだけど。

「…ねえ」

「ん？どうしたハルフアス。トイレに行きたいなら映画が始まる前に戻つて来いよ  
「ううん、そうじやなくて…こつち向いて？」

「ん？」

ハルフアスに言われるがままそちらを向けば、目の前には少し顔を赤くしたハルフアスの顔があつた。

「え、ちよ、ハルフアス…？」

「…」

あの、何か言つてくれませんかハルファスさん。この位置不味いんですよ。ハルファスが常日頃からダボツとしたタイプの薄着を好むせいで、胸元が！

「ゴミ、付いてたよ」

「え？ あ、おう。ありがとう」

あつつつぶねえ！ 何だそのお前の無自覚の危なさ！？俺じやなきや襲つちまうね。

ハルファスは多分、俺と付き合つてはいるものの、それがどういうことかあまり分かつていないのである。キスをしたい、とかつて言う感情も多分よく分からないんじやないだろうか。だから、俺としては出来るだけ彼女が自分から望むまでは、そういう事をするには待つておきたいという気持ちがある。

：あまり考えたくはないが、もしかしたら、彼女にとつて俺より大事で、好きな人が出来るかもしね。そしたら、俺とワケも分からずにしていたキスは彼女の心に何かしらのしこりを残すんじゃないだろうか。

俺は：できれば、そうなつて欲しくはない。だから、キスは彼女がその意味を知り、その感情を知つてからしたいと思っている。

ハルファスの、多分暖まつたから赤かった顔が離れていき、テレビを向く。そうなれば、俺も彼女の顔をいつまでもまじまじと見てはいる事はできない。名残惜しいが、テレ

ビに集中するしかないのだ。ドキドキしてそれどころじゃないけど。ドキドキと脈打つ胸に意識を向けていたからだろうか。俺は、ハルフアスがその後、指で唇に触れながらどういう顔をしていったのかを見ていなかつた。